



馬耳東風

今年も暮れようとしている。1年間を振り返る時、猛暑や台風など自然災害の発生が常態化した気候変動のことが頭を離れない。「温帯性気候・四季を持つ美しい国」も毎年のように激しい災害に見舞われると、日本は既に亜熱帯性気候地域に仲間入りしたと思いたくなる。人類の経済活動に因る地球温暖化が招いた気候変動とはいえ、規模が大き過ぎて加害者の一人としての実感が持てない。大量の石油を消費し、大量の生活物資を浪費し、大量の食糧を廃棄する生活を通じて、多くの国民が健康を害し膨大な医療費を使っている。これがわれわれの求める豊かな社会の姿であろうか？ 3年余前にホセ・ムヒカ前ウルグアイ大統領が「簡素に生きていれば人は自由だよ。貧しい人とは、限らない欲を持ち、いくらあっても満足しない人のことだよ」と答えていたが、実に含蓄のある言葉だ。

もう一つ常に頭の中で渦巻いている事は、倫理観が退廃し、利己主義が蔓延する社会と政治家の資質低下に因る政治不信である。戦争を推奨したり、人間の淘汰を正当化すると受け取られかねない発言が飛び出す事に象徴されるように、永田町に集まる議員は常識を欠き唯我独尊に陥った「政治屋」になった感がある。繰り返される不祥事に嫌気がさした国民に政治を信頼してほしいと言われても無理である。そんな中、関西電力の役員等が原子力発電所に関する会社から合計3億2千万円余の金品を受け取っていた事が発覚した。結果的には厳しい批判を受けて役員7人が辞任したが、経営者の責任は不問に処された福島原発の事故と同様に国民の怒りが収まるとは考えられない（台風豪雨によって希釈されたかも）。これら事件の最中、神戸の小学校教員4人が同僚いじ

めを繰り返し、相手をストレス性精神障害に追い込んだというニュースが報じられた。本件でも校長が内容を把握・黙認していたというから驚きである。これだけ常軌を逸した様々な事件が起こると、今後、日本はどうなのだろうと心配になる。

今年の年末も嘆き節になったが、去る9月23日、地球温暖化防止を目指す国連気候行動サミットで、スウェーデンの16歳の高校生グレタ・トゥンベリさんが各国の指導者を前に演説した。今の政治家は、気候変動を防止するための効果的な政策に取り組む姿勢が消極的で許せないと声を震わせて訴えた。「子ども達を見捨てる道を選ぶことは許されない、貴方達は私の夢を子どもの時代を空っぽな言葉で奪ってきたのに、未だにお金や経済成長の事ばかり考えている」と、30年以上も前に科学者が環境危機に警鐘を鳴らしたのに権力者は防止対策に積極的に取り組まなかったと痛烈に批判した。この映像をTVで見たとき、2014年のノーベル平和賞をカイラシュ・サティヤルティ氏（印）と共に受賞した17歳の女学生マララ・ユスフザイさん（パキスタン）の事を思い出した。銃撃され重傷を負いながらも女子の教育を受ける権利を訴え続けた彼女の勇気ある行動に驚嘆し、心から応援したい気持ちになった。2人の純粋な心には、自己の利益追求に明け暮れる今の政治家の濁った心に対する、大きな苛立ちと失望があるのだろう。わずかながら明るい未来への希望を感じた。今年もまた脱稿した直後、ノーベル化学賞が吉野 彰氏を含む3名に贈られると発表された。日本人として2010年以降、10人目のノーベル賞受賞者となり、素晴らしいことである。新しい年が明るい話題の多い年になってほしいものである。

(青)